



ジェンダー平等のために

2024 年 10 月、パートナーシップさいたまでのジェンダー平等基礎講座を、久しぶりに対面での講義で受けた。講師は独立行政法人国立女性教育会館(以下 NVEC と略す)研究国際室の研究員 島直子さん。ジェンダー平等をめぐる日本の現状について例を出しながら話され、特に子どもたちの意識は、親や社会の在り方に大きく影響されていることをあげられた。この講義を受けて、ジェンダー平等のためには、法律などによって機会の平等を保障すると同時に結果の平等まで実現させねばならないということを改めて思った。

講義の初めに島さんが NVEC の設立経緯や目的などを話された。NVEC が設立したのは1977年。その2年前の1975年は、国連が「国際婦人年」として、第1回世界女性会議がメキシコで開催されるなど、世界中で女性解放運動の機運が高まっていた。日本では当時、家事・育児は女性が担うのが当然とされ、男女の教育機会の格差も大きかったので、「女性の地位向上」には「女性の教育」が重要であるとされ、そのために、女性リーダーを対象とした研修や交流・調査研究や情報提供を行う、成人女性の学習を促進する機関の設立が期待された。国は、全国的女性団体などと連携して、埼玉県比企郡嵐山町の豊かな自然の中で女性が自由に学習できる環境の提供を目的に NVEC を設立したのだ。

世の中は、まだ男は仕事、女は家庭という意識の強かった50年前、私は、仕事も家事も育児もきちんとやりたいという願いとやりきれないで積み重なる壁に途方に暮れていた。そんな中、1975年の「国際婦人年」は国連が女性の地位向上を目指して設けた国際年であり、自分の生活も変わってほしいという期待を持たせてくれた。NVEC は、仕事の研修やイベントへの参加と何度も利用した。そこは、多くの人と出会い、学び、力をつける場であった。何よりも、豊かな自然の中で家事も育児も家族に任せ、ゆっくり泊まり込みで参加できることがうれしかった。

「女性教育会館 閉鎖伝達 国方針」(2023 年 12 月 13 日読売新聞)という突然の報道に、地元からの反対の声が上がり、大野県知事も「現状では受け入れることは困難」とする意見書を国に送付した。(2023 年 12 月 23 日東京新聞)それから約半年が過ぎた今年の 7 月、「国立女性教育会館、埼玉・嵐山町で存続へ 国が町と県の要望受け入れ」(2024 年 7 月 30 日朝日新聞)という記事がでたが、存続させるのは、本館のみ、宿泊棟と研修棟は撤去するというものであった。

現在の場所に本部のみを残しても、宿泊ができなければ全国から集まって交流し、おたがいに学びあうことはできなくなってしまう。女性の地位向上はまだまだだ。ジェンダー・ギャップ指数が146か国中、118位(2024 年)という日本が、ジェンダー平等の社会にしていくなためにも、NVEC の役割はまだ終わっていないのだと思う。半世紀前に「女性の地位向上」のためにと設立にかけた思いを顧みて、続けるための努力をしてほしい。

(磯部)

『顔ニモマケズーどんな「見た目」でも幸せになれることを証明した9人の物語』

水野敬也著
文響社
(2017年)



あなたは、「自分の外見がもっと美しかったらいいのに」と思ったことはありませんか？

”はじめに”の章、最初の1文。ドキっとした人は、多いのではないかな。登場人物は、9人の「見た目問題」を抱えてきた人達。いくつもの悩みや壁を乗り越えてきたサバイバーが、どう人生をサバイブしてきたか。経験者だから語れるリアルな実体験の言葉が溢れている。プランAがダメなら、プランB、Cと次々と伝え方、表現の仕方、取り組み方を考え行動に移していく様は逞しく頼もしい。9人9様のストーリー。見た目問題の当事者による言葉だからこそ沁みる。

生まれつき、見た目の問題を抱えていなくても、不慮な事故、病気の治療、術後の外見の変化、あるいは、老いに対する漠然とした不安などは思い当たる方も多いただろう。他者の視線とどう付き合うか、壁を乗り越えるヒントのロールモデルとしてぜひ、手に取ってほしい。

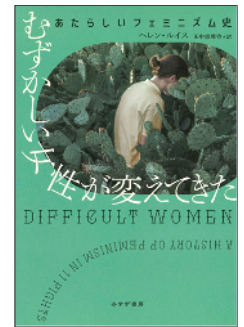
かくいう私も赤アザ(単純性血管腫)の持ち主である。私にとっては、バイブルのような一冊で、手元にお守りのように置いて、何度も読み返したくなる本だ。読み返す度に、刺さるフレーズが変わる。私の弱っている箇所に染み入るサプリメントのような言葉の数々。

厚みのある本ではない。行間もゆったりとしたインタビュー形式で読みやすい。早ければ30分程で読み切れる。読後感は、清々しく。明日を迎える勇気を分けてもらえる。

様々なコンプレックスを抱えている人にはきっと、必読書になるだろう。(木下)

『むずかしい女性が変わってきた
あたらしいフェミニズム史』

ヘレン・ルイス著
田中恵理香訳
みすず書房
(2022年)



11のテーマ(原題に11FIGHTSとある)でフェミニズムの歴史が記されている。むずかしい女性とは、「複雑」な女性のことで、無作法とか偏狭とか意地悪という意味ではない。女性に押し付けられる“良い人”縛りに収まらない女性のことである。それがどのように「むずかしい」のか。

テーマの一つ「参政権」で紹介されるのは、女性参政権運動に参加した女性達サフラジェットだ。1900年代、世間的に正しいとされている事のみを行っても世の中が変わらないことに業を煮やした女性達は、「投票権がない限り、秩序を守るわけにはいかない」と、過激なキャンペーンを行った。ハンガーストライキに対する政府の強制摂食(4~6人で押さえつけ、チューブで胃に食べ物を流し込む。弱った体を痛めつけ、呼吸もできない)などの拷問を受けても、火をつけたり、電信線を切断したり、爆弾を仕掛けようとしたりした。「レディらしく」いる縛りから解放されるためだ。

「暴力は良くない」が、この運動で女性に投票権がもたらされた。これがサフラジェットのむずかしさだ。歴史を変えたが、暴力的だった。過激だったが、世の中を変えた。

「現代のフェミニズムが先鋭さに欠けると感じられるなら、それは二つの手段に逃げているからだ。一つは意味もなくただ称賛するだけであり、もう一つは明らかな敵がわかっているのにまともに対決しない。どちらも複雑さと向き合っておらず、何も変えられない」と著者は指摘する。歴史を変えたむずかしい女性達の真実を知ること、トランスジェンダリズム、セックスワーク論などの欺瞞に向き合うためのカギが見つかるかもしれない。(野田)

『アンナ・コムネナ』1～5

佐藤二葉

星海社 COMICS

2022 年～

(最終巻6は 24 年 12 月

発行予定)



ビザンツ帝国皇帝アレクシオス一世の皇女であるアンナ・コムネナの物語である。表紙の絵をはじめ、オールカラーのこの本は美しく、登場人物たちの衣装や装飾品にも目を奪われる。

主人公のアンナ・コムネナはビザンツ皇帝の第一子でありながら「女」だから弟が誕生した時点で皇位継承権を譲ることとなり、悔しい思いを抱えながら生きている。また、彼女は文才に優れた人物であったそうだが、これまた「女」がものを書くことをよしとしないこの時代、父親から認められないから書くことを隠したいと思っている。彼女は父親をいたく尊敬して、「お父様と一緒に平和な世界を実現したい」から「皇帝の座につく」ことを諦めずにいる。

彼女の夫は、彼女に理解を示しペン(葦ペン)や羊皮紙を提供する。「書くこと」は夫との秘密となりその秘密を共有しながらふたりは絆を深めていく。

資料を読み解き、研究者から助言を得て描き進められたであろうこの本には魅力的なセリフがちりばめられている。一部を抜粋する。

「男ってだけで無駄に好戦的な弟が世継ぎだなんて。平和を愛するわたしのほうがふさわしい」「わたしは帝国のみならず世界の平和を実現する人間」

「わたしが女だからって嫌な思いをしたらそう思わせる世界のほうが悪い」「わたしは女らしい戦いも男らしい戦いもしない。わたしはわたしらしく平和に戦います」。現代にも通じる言葉にハッとすると同時に今よりもはるかに女性たちが不自由であった時代にこんなに頼もしい先輩がいたのかと敬服する。

アンナと、皇位を継承する弟との対立がどう結着するのか続きが気になる。

(佐藤)

『BUTTER』

柚木麻子

新潮社

2017 年



実際に起きた首都圏連続不審死事件とその犯人木嶋佳苗を題材にした小説。私が、当時の事件を思い出すのは、マスコミなどが犯人像をデブ、ブスといった容姿でくり、毒婦という文言で作り上げたこと、そういうものから何をどうとらえていいのかわからなかったことだ。そのままずっと記憶の向こうに追いやっていた。

なぜ今、この本をとりあげたのか。作家がどう描くのが面白かったし、昔、私もバターかけご飯を食べていたなあと思い出したりしたから。事件のこと、犯人のこと、作者が小説の中で取り上げた『ちびくろサンボ』のこと、ネットで検索していろいろ読んだ。そういう事を背景として頭に入れて読んでみると、作家が描く人物像に思い入れが深まった。

小説の主人公で週刊誌記者の町田里佳は、事件や犯人像を本人と話すことでつかもうと何度も面会するのだが、犯人の言葉に翻弄されていく。町田の内面も外見も変わっていき、友人、恋人、会社の仲間をも変えていく。犯人とどうかかわって、どう決着をつけたのか。作者が登場人物に様々なことを行わせ、言わせることが出来る小説の面白さを味わえた作品であった。

1981 年生まれの作家柚木麻子が、
「ありがと。でも、今はまだまだ踏ん張れそうよ。でも、もう無理ってなったら、遠慮なく頼る。それにね、里佳が自分のやりたいことを我慢して手伝ってくれるより、こうやって、好きなことをして、自己管理してくれるほうが、親孝行。私も身体を大事にして、楽しくするようにするから。」と離れて暮らす母親に言わせている。こんなことにほろりとしてしまう高齢の私である。

(磯部)

第29回「ブックトーク&井戸端会議」

さいたま市女性学研究会(ゆい)主催

2025年2月9日(日) 14:00~16:00 パートナーシップさいたま 会議室3 定員24名

「小説の世界を泳いでみよう。その1」

『BUTTER』 柚木麻子 新潮社 単行本(2017年) 文庫本(2020年)

実際に起きた事件とその犯人を題材に作家柚木麻子が描く小説。週刊誌の記者である町田里佳が、男たちの財産を奪い、殺害した容疑で逮捕された梶井真奈子に面会して人物像や事件を描こうとしたが、一筋縄ではいかない。男をケアするのは女の役目、容姿をけなされる梶井、太ってはいけなないとわが身を責める町田、食べたいという欲望、生まれや育ちが作り上げる性格など、作者は、登場人物に様々なことを行わせ、語らせる。みなさんのアンテナには、何がひっかかりましたか？

参加ご希望、お問い合わせは、さいたま市女性学研究会事務局までご連絡ください。参加費 200 円。

事務局<磯部(いそべ)> 電話:048-641-3765 Eメール: i.sachie@nifty.com

〈新潮文庫〉

■パートナーシップさいたま耳寄り情報■



第4回パートナーシップさいたまフェスタ(テーマ:ジェンダー平等を実現しよう)

【特設サイトでのオンライン企画&会場(パートナーシップさいたま)での出展イベント】

開催期間:令和7年1月17日(金)~2月16日(日)

開催内容

- 1 基調講演動画配信 テーマ:「脳科学から考えるジェンダー」
講師: ^{よつもとゆうこ} 四本裕子さん(東京大学大学院総合文化研究科教授)
- 2 基調講演動画配信 テーマ:「ジェンダー平等と男性の働き方・暮らし方」
講師: ^{たがふとし} 多賀太さん(関西大学文学部教授)
- 3 出展団体プログラム(イベント・講座・展示)
- 4 令和6年度パートナーシップさいたま実施オンライン講座 プレイバック配信
- 5 男女共同参画施策の紹介 等

お申込み・詳細

さいたま市男女共同参画推進センターホームページをご覧ください。

<https://www.city.saitama.lg.jp/006/010/002/0010/013/p117110.html>

「ゆい」2024年冬号 第10号 (2024年12月1日発行)

編集 さいたま市女性学研究会(ゆい)

マーク、題字 野田

<事務局>磯部幸江 電話 048-641-3765 Eメール i.sachie@nifty.com

発行 さいたま市男女共同参画推進センター | パートナーシップさいたま

〒330-0854 さいたま市大宮区桜木町1丁目10-18シーノ大宮センタープラザ3F

電話 048-642-8107 FAX 048-643-5801

<https://www.city.saitama.lg.jp/006/010/002/>